

前から 後ろから



主よ、あなたはわたしを究め／わたしを知っておられる。

前からも後ろからもわたしを囲み／御手をわたしの上に置いてくださる。

詩編 139 編 1 節、5 節（日本聖書協会・新共同訳）

いつの頃からか、金魚物（きんぎょもの・著者の造語）を集めるようになりました。それは、お風呂で浮かべて遊ぶ玩具から始まって、暑中見舞いの絵はがき、浴衣地など——金魚の形をした物や絵柄の入ったものなら何でも——。本物も飼ってみたいのですが、命あるものをいい加減には扱えず、今のところはペットショップでその姿を楽しんでいます。

金魚に興味を持ち始めたのは、幼い頃に見た7円切手がきっかけです。黄緑色の背景に朱色の金魚の図柄は、私の中でずっと可愛らしい印象として残っていました。ご存知のように日本の風物詩になっている金魚は、夏になると多く見られます。そして、日本人の多くがメダカでもなくフナでもなく、なぜ金魚を好んで生活の中に取り入れているのかを知りたくなって集め始めたのが、先の金魚物です。あるときデパートで開催されていた中国展にたまたま足を運んでみたところ、絵画・切り紙・置物などいろいろな分野で金魚が作品になっているのに出会いました。そして、中国では金魚は昔から縁起物として人々に好まれていることも知りました。

そうこうして集まった金魚物を一堂に並べて眺めていたら、二つのことに気がきました。それは、中国製の物は金魚を上から見てその形を捉えたものが多く、それに対して日本の物は、横から見て特徴を捉えているものが多いということです。そして、面白いことに飼育のための専用容器も、中国では金魚を上から見るように平たく底の浅い陶

製の水盤から始まったのに対して、日本はガラス製の丸い小さな容器から始まっていました。これは金魚を横から——それもレンズ効果でより大きく見えるように、と出来ているのです。ところが、このように中国と日本で金魚を見る角度は違っていても、捉えたかった特徴はどちらも同じ尾びれだったのです。金魚が泳ぐときに見せる尾びれの優雅な舞いを、人々は長年美しいと思え愛でてきたのです。私にとって、これは大きな発見でした。

日々の生活の中で人と接するとき、私たちはその人のことを正しく見ているのでしょうか？ 最初の印象だけでその人の全体をとらえた気になったり、またその人への信用の持ち方を決めてしまったり、ということは少なからずあります。そして、その人と関わっていくうちに自分の間違った見方に気が付いていくのも事実です。正しい見方であれば、いつでも状況は変わりません。正しく見られるまでには、もしかしたら人生経験が必要なのかもしれません。

神様は、私たちのことをいつも変わらない思いでとらえてくださいます。そして、私たちがどんなにつらい時も悲しい時も、前から後ろから、そして上からも横からもその手で私たちをおおって守ってくださるのです。ですから、私たちは安心して、毎日を過ごしていくことができるのです。

JUN